

中部大学新入生の意識変化 —25年間の学生相談室アンケート結果より—

桐山 雅子・小塩 真司・願興寺 礼子・佐藤 枝里

1 目的

これまでわれわれの研究グループは、中部大学の新入生を対象とした学生相談室アンケートについて、継続的な分析を行ってきた（願興寺・小塩・桐山, 2007; 小塩・願興寺・桐山, 2005, 2006, 2007a, 2007b, 2008a, 2008b; 小塩・桐山・願興寺, 2006; 小塩・佐藤・願興寺・桐山, 2011; 小塩・吉住・佐藤・願興寺・桐山, 2009, 2010; 脇田・小塩・願興寺・桐山, 2007）。これまでの報告では、ある指標に注目してその入学年度による変化を追ったり、ある入学年度に注目して学部・学科別の得点や選択率の差に注目したりしてきた。

学生相談室アンケートは、新入生を対象として恵那キャンパスで行われる研修の中で継続的に実施されてきた。このアンケートは1988年度から研修に参加する全新生を対象に行われており、一部の年度に欠損があるものの、2012年度で25年間のデータが蓄積している。果たして、この25年間で、中部大学に入学してくる学生の意識は変化したのだろうか。

学校法人中部大学七十年史（大西, 2009）によると、中部工業大学は1984年に工学部に加え経営情報学部と国際関係学部を設置し、3学部10学科の総合大学「中部大学」として新たにスタートした。そして1998年4月、中部大学女子短期大学からの改組転換により人文学部が誕生、2001年4月には応用生物学部、2006年4月には生命健康科学部、2008年4月には現代教育学部が設置された。学科の新設や改組が順次行われることにより、2012年現在、中部大学には7学部29学科が設置されている。

このような学部・学科の新設によって、入学してくる学生の層に変化が生じるとも考えられる。しかしながら本報告では、中部大学に入学してくる新入生の意識が全体として変化しているのかどうかに焦点を当てる。なお、限られた紙面で学生相談室アンケートのすべての項目について報告することはできない。そこでここでは、中部大学選択理由、進学目標、学科選択理由、学業への取り組み方、教員とのかかわり方、かかわり希求、学科選択満足度の7つに焦点を当てる。これらは、中部大学への進学にあたっての学生の意識を反映した項目であると考えられる。

2 方法

2.1 回答者数

各入学年度の総回答者数を表1に示す。1996年度新入生に関しては、データを入手することができず、欠損している。1988年度から1997年度までについては各項目への選択者数のみ、1998年度以降については各回答者個人のデータが存在している。

表1 入学年度と回答者数

入学年度	人数	入学年度	人数	入学年度	人数
1988	1294	1998	1960	2008	2180
1989	1467	1999	1810	2009	2459
1990	1346	2000	1730	2010	2342
1991	1604	2001	1982	2011	2450
1992	1856	2002	1995	2012	2532
1993	1808	2003	2006		
1994	1753	2004	1825		
1995	1770	2005	1905		
1996	—	2006	1979		
1997	1638	2007	1969		
					合計 45660

2.2 分析対象項目

学生相談室アンケートは4つのパートで構成されており、第1のパートは中部大学を選んだ理由や大学に進学するにあたっての目標、学科を選択した理由、第2のパートは学業への取り組み方や教員とのかかわり方、第3のパートは満足度や悩みの有無、悩みの内容、第4のパートは健康理解のための調査項目などである。

本報告で分析の対象とする6項目は表2に示すとおりである。「中部大学を選んだ理由（中部大学選択理由）」「この大学に進学するにあたっての目標は（進学目標）」「いまの学科を選んだのは（学科選択理由）」については複数回答が可能な項目であり、「学業への取り組み方」「大学の先生とのかかわりについてあなたは（教員とのかかわり方）」「先生とどのようなかわりを求めているか（かかわり希求）」「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは（学科選択満足度）」については選択肢のうち1つを回答する形式であった。

表2 分析に用いた項目と選択肢

項目と回答の選択肢
(1) 中部大学を選んだ理由（複数回答可）
1 大学の特徴、学科の内容をよく知っていて、良いと思ったから
2 通学距離、家庭の事情でなんとなく
3 学力を考えて
4 本当は他の大学へ進学したかったが、希望の大学に入れなかったの
5 友達にこの大学へ進学する者が多かったの
6 先生や親にすすめられたの
7 推薦入学ができたの
8 なんとなく
9 その他
(2) この大学に進学するにあたっての目標は（複数回答可）
1 専門的学問、技術を身につける
2 教養を高め、人間的に成長する
3 就職の条件をよくする
4 大学生活をエンジョイする
5 教官や友人などとの人間的接触を得る
6 とくにない
7 わからない
8 その他
(3) いまの学科を選んだのは（複数回答可）
1 自分の適性を考えて自分で
2 就職や将来性を考えて自分で
3 合格の可能性を考えて
4 親や家族にすすめられて
5 学校の教師の意見で
6 友人の影響をうけて
7 希望の学科に入れなかったの
8 その他
(4) 学業への取り組み方（1つ選択）
1 専門的知識を吸収し、はやく実社会に出て、専門をいかしたい
2 社会での実力は、大学での勉学とは別だと思うので、大学での勉学は単位がとれる程度でよいと思う
3 大学を卒業することは重要だと思うが、単位を履修することができるかどうか不安である
4 その他
(5) 大学の先生とのかかわりについてあなたは（1つ選択）
1 積極的に話しかける
2 きっかけが分からない
3 期待していない
4 その他
(6) 先生とどのようなかかわりを求めているか（1つ選択）
1 学問・研究の話
2 人生・社会・学生生活
3 相談・アドバイス
4 コンパ等
5 その他
(7) 中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは（1つ選択）
1 満足である
2 どちらかといえば満足である
3 どちらでもない
4 多少不満である
5 不満である
6 その他

2.3 分析方法

いずれの回答についても、複数選択可能な項目については各入学年度において1000人あたりの選択者数を算出し、その選択者数に対してカイ2乗検定と調整済み残差を算出することで入学年度による選択者数の変化を検討した。また、単一回答の項目については、各項目の選択者数そのものをカイ2乗検定と調整済み残差の分析対象とした。

3 結果と考察

3.1 中部大学選択理由

中部大学選択理由の各項目への選択率を入学年度ごとに示したものが図1である。なお図1の項目は、選択率の高い順に示してあるため、以下の説明もその順番に行う。1000人あたりの選択者数を算出し、カイ2乗検定を行ったところ回答の偏りは有意であった($\chi^2 = 1401.53$, $df = 184$, $p < .001$)。調整済み残差の値から、次のような傾向が見られた。

「4. 本当は他の大学へ進学したかったが、希望の大学に入れなかったの」については、88, 91, 95, 98, 02, 03の各年度が高く、00, 04, 06, 07, 08, 12年度が低い傾向にあった。全体としてこの項目への選択率は高いものの低下傾向にあり、他大学を希望していたが希望の大学に入れず中部大学に入学したという意識の新入生は低下傾向にあった。AO入試や推薦入試など、進学内定時期の早期化が背景にあることが考えられよう。

「3. 学力を考えて」については、88, 89, 90, 91, 10年度が低く、99, 04, 05年度は高い傾向にあった。80年代から90年代にかけてこの項目の選択率は上昇したが、2000年代以降は小幅な上下を繰り返している。

「1. 大学の特徴、学科の内容をよく知っていて、良いと思ったから」については、全体として2000年度以前は低く、2001年度以降は高い傾向にあった。以前に比べ、近年の新入生は大学や学部、学科の特徴を吟味した上で受験する傾向にあると言える。オープンキャンパスやホームページによるPR活動が功を奏しているのではないだろうか。

「7. 推薦入学ができたの」については、88, 89, 90, 00, 06年度が高く、99, 02, 03, 04, 05, 09, 11, 12年度が低い傾向にあった。以前に比べ入学者数に対する推薦入学の枠は拡大しており、推薦入学をすることができたからという理由をあえて大学選択の理由として挙げる割合が低下しているのかもしれない。

「2. 通学距離、家庭の事情でなんとなく」については、明らかに近年になるにつれて選択者数が減少し、2000年代以降は一定数で安定していた。およそ15%の学生がこの項目を選択しているが、90年代初頭のバブル経済崩壊直後に比べると、家庭の事情を大学選択理由に挙げる新生は少なくなっているようだ。

「6. 先生や親にすすめられたの」については、88, 07, 10, 11, 12年度が高く、92, 93, 94, 99年度が低かった。特に近年、この項目への選択者数が上昇していると言える。

「8. なんとなく」については、90年代終わりと07年度が高いが、近年は低下傾向にある。何らかの明確な意識をもった進学理由が増えているといえるだろう。

「9. その他」および「5. 友達にこの大学へ進学する者が多かったの」については、全体の選択者数も5%未満であり、入学年度による明確な変化も見られなかった。

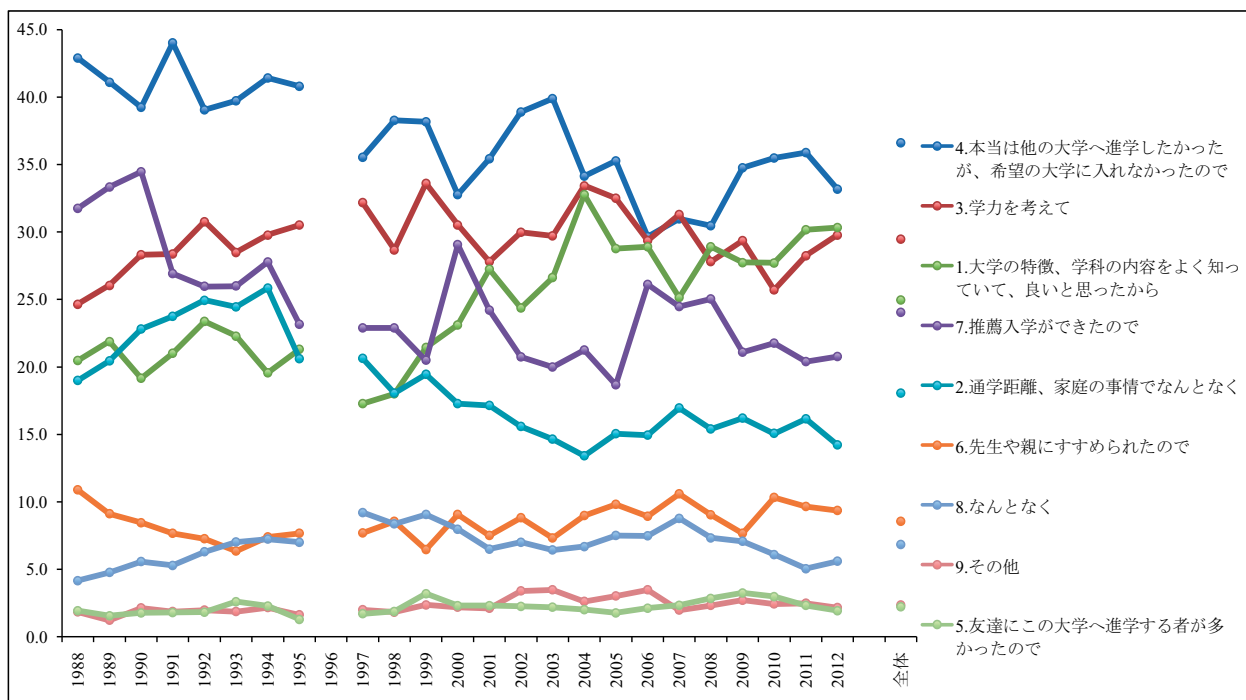


図1 入学年度ごとの中部大学選択理由各項目の選択者比率

3.2 進学目標

進学理由の各項目への選択率を入学年度別に示したものが図2である。カイ2乗検定を行ったところ有意であり ($\chi^2 = 569.47$, $df = 161$, $p < .001$)、選択率に偏りが見られた。調整済み残差を確認したところ、次のような特徴が見られた。

「1.専門的学問、技術を身につける」については01, 02年度が高く、10年度が低いという傾向のみで入学年度による差がほとんど見られなかった。およそ7割にものぼる多くの学生が、進学目標としてこの項目に回答している。

「4. 大学生活をエンジョイする」についても98, 99年度が高く11年度が低い傾向にあったものの、大きな入学年度による変化は見られない。およそ4割の学生がこの項目を進学目標として挙げている。

「2. 教養を高め、人間的に成長する」については、88, 11年度が高く、98, 01年度が低い傾向にあったが、この項目についても大きな変化は見られなかった。やはり近年では4割程度の学生がこの項目を進学理由として挙げている。

「3. 就職の条件をよくする」については、2005年度以降において有意に選択者数が多くなっていた。大

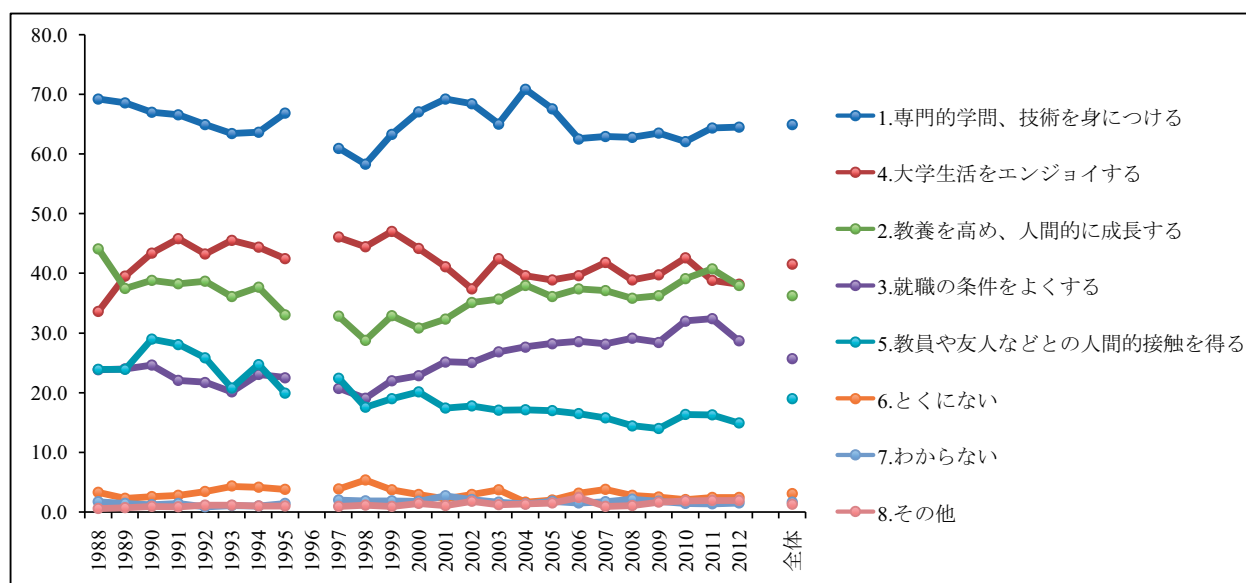


図2 入学年度ごとの進学理由の選択者比率

学の就職状況の悪化とともに、この項目の選択率は上昇する傾向にあるといえよう。

「5. 教員や友人などとの人間的接触を得る」については逆に、2003年度以降において選択者数が有意に少なくなっていた。2012年度新入生においては、この項目への選択率は15%未満にまで低下している。目的志向性は高いものの、学内の人間関係に交流を期待しない学生像が見受けられる。

「6. とくにない」「7. わからない」「8. その他」の3項目については選択率も5%未満であり、大きな入学年度による差も見られなかった。

3.3 学科選択理由

学科選択理由の各項目への入学年度ごとの選択率を図3に示す。選択率の差は有意 ($\chi^2 = 407.70$, $df = 161$, $p < .001$) であり、残差分析を行ったところ次のような特徴が見られた。

学科選択理由については、「1. 自分の適性を考えて自分で」と「2. 就職や将来性を考えて自分で」の2つの理由がともに5割前後の選択率となっている。残差分析の結果、前者については92年度が高く、88, 89, 11, 12年度は低くなっているのに対し、後者は97, 98, 99年度が低く、89, 08, 10, 11, 12年度が高い傾向にあった。特に近年では、自分の適性よりも就職や将来性への意識が学科選択を促す傾向にあるようである。

「3. 合格の可能性を考えて」については、88, 91, 94, 97, 99年度が高く、08年度以降は低い傾向にあった。08年度以降、この項目の選択率は10%未満となっている。また他の項目についてはいずれも5%未満の選択率であり、入学年度による差も明確ではなかった。

3.4 学業への取り組み方

学業への取り組み方の4項目への入学年度別の回答者比率を図4に示す。選択率の偏りは有意であり ($\chi^2 = 368.42$, $df = 69$, $p < .001$)、調整済み残差から次のような特徴が見出された。

「1. 早く実社会へ出て専門を生かしたい」への選択については、99, 00, 06, 07, 08年度が低く、95, 04, 12年度が高かった。

「2. 大学での勉学は単位がとれる程度でよい」については、88, 89, 00, 01, 04, 11, 12年度が低く、97, 98, 05, 08年度が高かった。

「3. 単位を修得できるかどうか不安」については、94, 02, 03, 04, 05年度が低く、00, 06, 07, 08年度が高かった。

学業への取り組み方については、入学年度を経るごとに一定の方向への変化が見られるわけではない。多くの学生は「早く実社会で専門を活かしたい」もしくは「単位を修得できるかどうか不安」という積極性と不安のいずれかの項目への選択に分散しており、「単位が取れる程度で良い」という消極的な学業への取り組みを示す学生はほぼ10%程度に限られている。単位修得の不安については、オリエンテーションや学生への丁寧な説明等で対応できる問題であると考えられるので、何らかの対応が望まれるであろう。

3.5 教員とのかかわり方

教員とのかかわり方4項目への入学年度別の回答者比率を図5に示す。回答の偏りは有意であり ($\chi^2 = 976.56$, $df = 69$, $p < .001$)、標準化された残差の値から次のような特徴が見られた。

「1. 積極的に話しかける」への選択率は、93年度から01年度にかけて低く、07年度以降は高くなっていた。「2. きっかけが分からない」への選択率は、98,

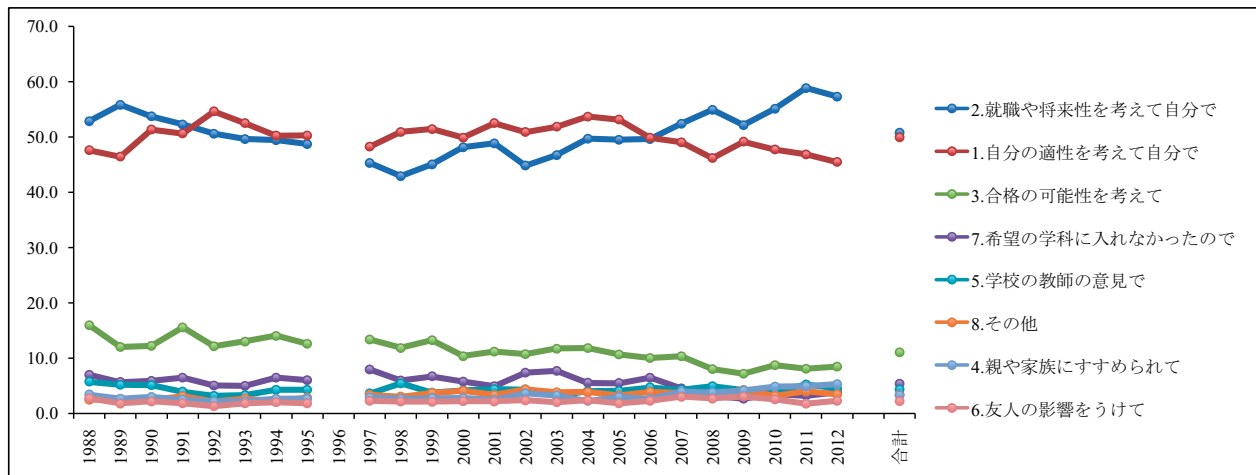


図3 入学年度ごとの学科選択理由の選択者比率

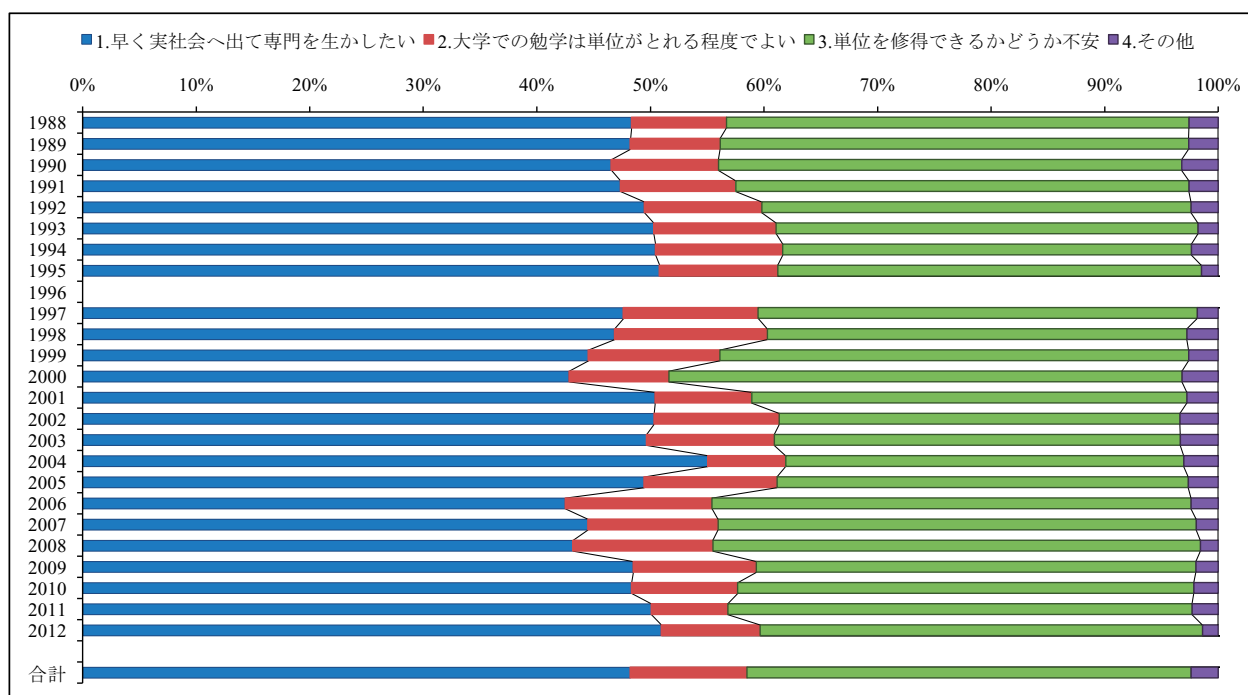


図4 入学年度別の学業への取り組み方各項目への回答比率

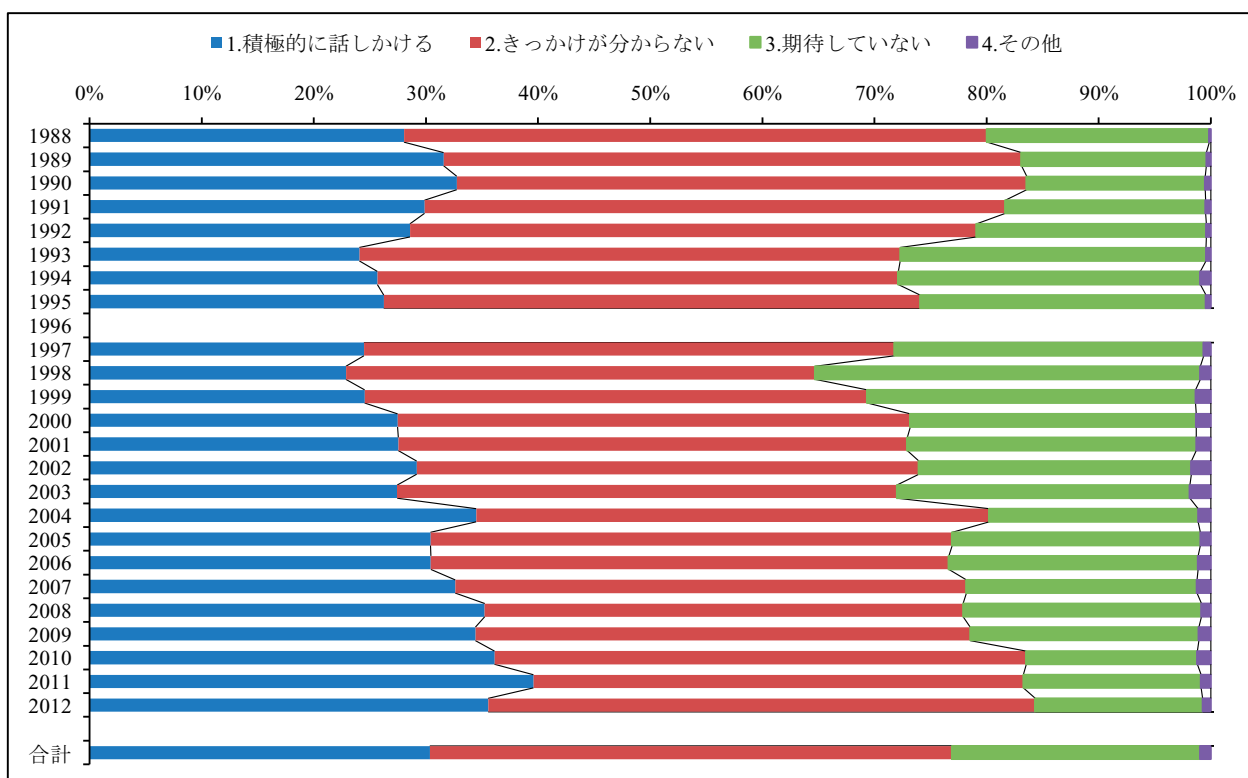


図5 入学年度別の教員とのかかわり各項目への回答比率

08, 09年度が低く、88から92および12年度が高くなっていた。「3.期待していない」への選択率は、88から91年度は低く、93から03年度にかけて高く、04,09年度以降は低くなっていた。

これらの結果から、近年は積極的に教員に話しかけようとする学生が増加しており、その一方で教員との

かかわりを期待していない学生が減少する傾向にあることがわかる。しかしながら、およそ4割から5割の学生は「きっかけが分からない」と回答していることから、教員と学生との交流をよりいっそう促す施策が求められるといえるだろう。

3.6 かかわり希求

教員とのかかわり希求の各項目への入学年度別回答比率を図6に示す。回答の偏りは有意であり ($\chi^2 = 746.11$, $df = 92$, $p < .001$)、調整済み残差の数値から、次のようなことが見出された。

「1. 学問・研究の話」への回答については、88, 89, 90, 07, 10年度が少なく、98, 01, 04年度が多かった。「2. 人生・社会・学生生活」への回答については、88, 89, 95, 98年度が少なく、00, 03, 08, 10, 12年度が多かった。「3. 相談・アドバイス」については、99, 01, 02, 03年度が少なく、88, 89, 95, 07年度が多かった。「4. コンパ等」については、02および04年度以降が少なく、95および93年度以前が多かった。

特に入学年度による変化が見られたのは、「4. コンパ等」への選択比率の低下であった。回答が単一選択であることを考えると、低下傾向が示されたことは理解に難くない。しかしその一方で、例年100人弱の新入生がコンパを通して教員と接したいと希求していることも無視できないと思われる。

入学年度による変化は見られていないものの、毎年度およそ9割の学生が教員に対して相談やアドバイスを求めている、教員と学問や研究について、あるいは人生や社会・学生生活について話をしたいと希求していることは確かである。PSHやオフィスアワーを有効に活用して、学生の求めに応じていく必要があると考えられる。

3.7 学科選択満足度

学科選択満足度の各項目への入学年度別回答比率を図7に示す。回答の偏りは有意であり ($\chi^2 = 484.78$, $df = 115$, $p < .001$)、調整済み残差の数値から、次のようなことが見出された。

「1. 満足である」への選択率については、93, 94, 95, 98, 99, 00, 02, 05年度が低く、91, 92, 09, 11, 12年度は高かった。「2. どちらかといえば満足である」については、91, 06年度がやや低いのみであり、大きな入学年度による差は見られなかった。「3. どちらでもない」については、88, 89, 91, 92, 11, 12年度が低く、98, 99, 06年度が高かった。「4. 多少不満である」については、07年度と09年度以降が低く、91, 00, 02年度が高かった。「5. 不満である」については、09, 10年度が低く、98, 03, 06年度が高かった。

91, 92年度は34~35%の新入生が「1. 満足である」を選択しており、00年度には27%にまで低下したものの、11, 12年度は37%以上の学生が選択するまでに回復した。他の選択肢については明確な傾向が見られるわけではないが、最近数年間の新入生の学科選択満足度は1990年代から2000年代前半に比べると高い傾向にある。この満足度は、新入生の意識の中でも、全体として良好な感覚を反映すると考えられることから重要な意識の要素であると考えられる。

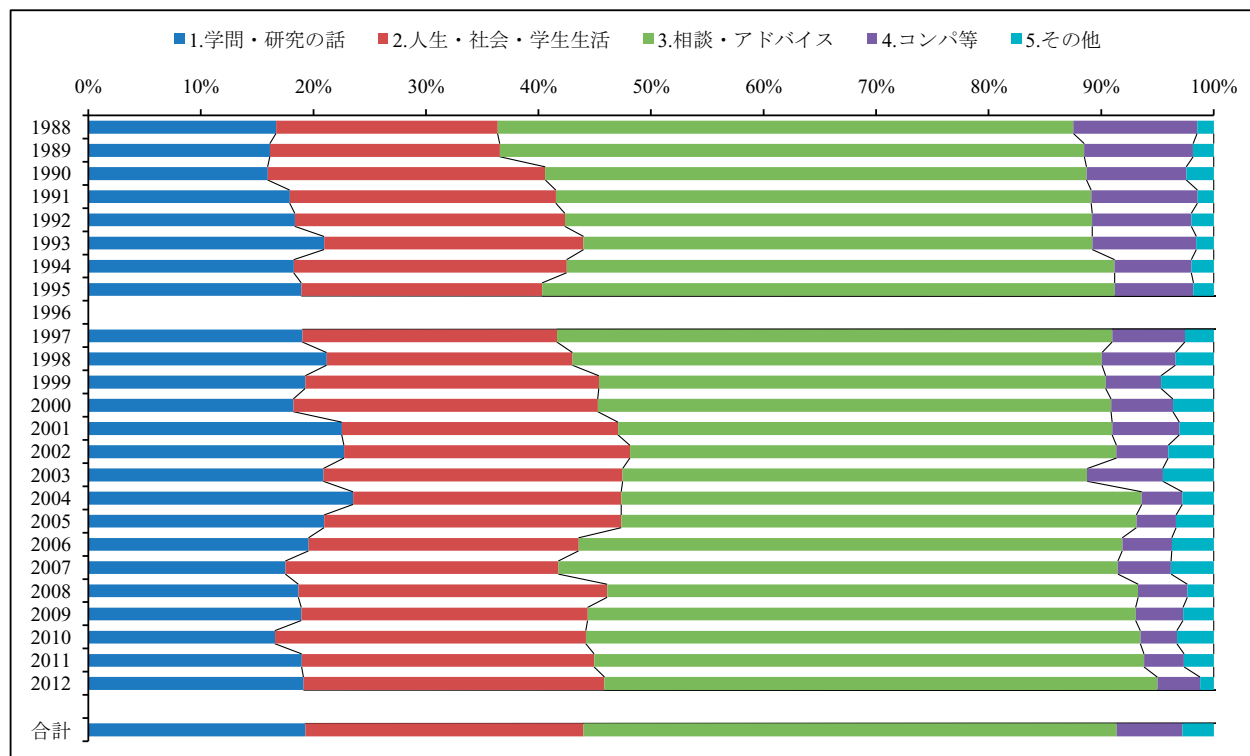


図6 入学年度別のかかわり希求各選択肢への回答比率

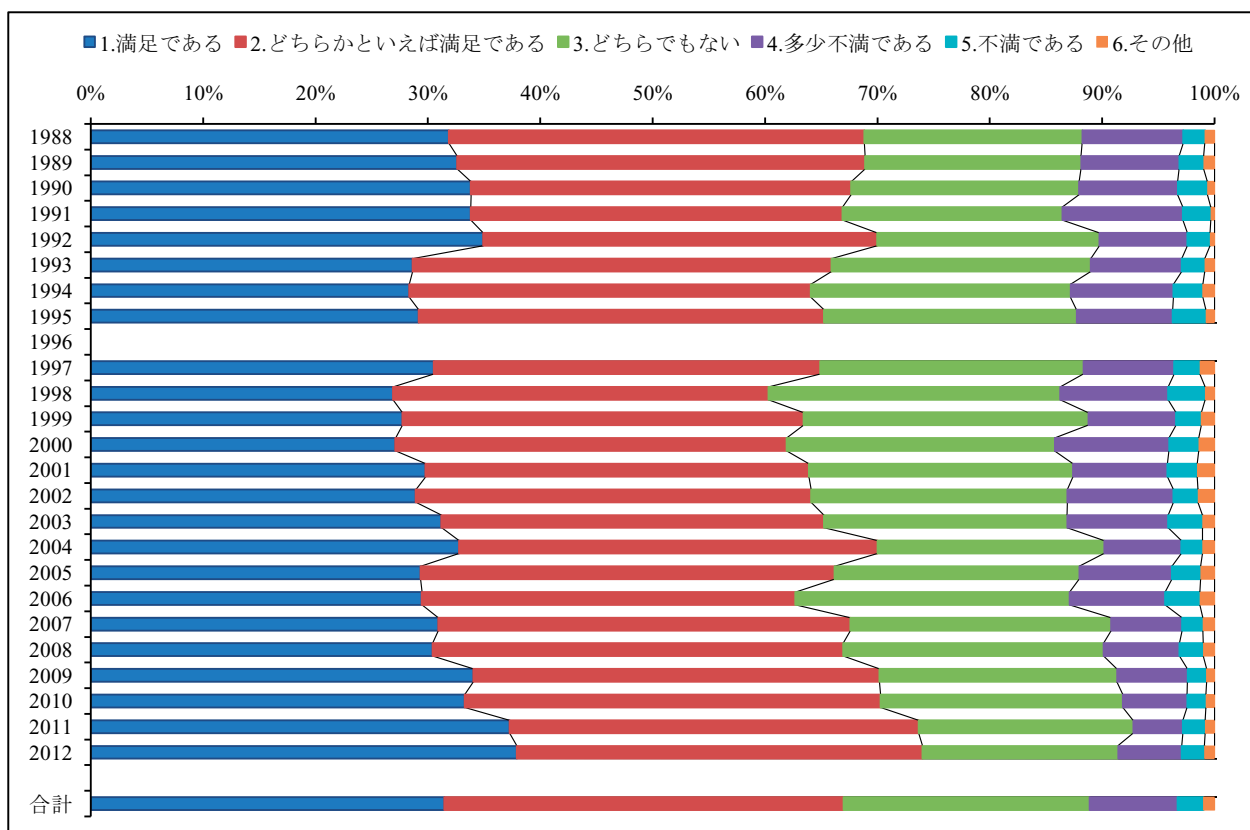


図7 入学年度別の学科選択満足度各選択肢への回答比率

4 まとめ

本報告では、25年間にわたる学生相談室アンケートから、中部大学選択理由、進学目標、学科選択理由、学業への取り組み方、教員とのかかわり方、かかわり希求、学科選択満足度の7つに焦点を当て、入学年度に伴う変化を検討した。

以前に比べて近年の新入生は、大学や学部・学科の特徴を調べて魅力を感じ、また教師や親の勧めに後押しされながら入学する傾向にあり、多くの新生は専門的な学問や技術を身につけることを目標としている。特に近年は、就職や将来のことを考える新生が増加しているが、これは実学にかかわる学部・学科の増加にも関係しているのではないかと考えられる。また、以前よりも最近の学生は、教員に対して積極的に話しかけようとする傾向にある。そして、近年は学科を選択したことに対する満足度が高い傾向にあるといえる。加えて、経年変化なく50%弱の学生が教師とのかかわりとして「相談・アドバイス」の希求を選択していることも興味深い。四半世紀にわたり、教師に相談やアドバイスを欲している新生の実像に迫る必要があると思われる。

全体として、中部大学に進学するにあたっての学生の意識という点から見ると、積極的で真面目な学生が増加する傾向にあるように見受けられる。興味深いこ

とに、各項目の入学年度ごとの変化を見ると、学部や学科の増設による急激な変動というよりは年度を経るごとにだらかに回答率が変化するようにも見受けられる。このような変化が受験生全体の意識の変化に一致するかどうかについては、本学以外の意識調査に照らし合わせて考える必要があるだろう。

文献

- 願興寺礼子・小塩真司・桐山雅子 (2007). 中部大学新生の心理的健康の年次変化—UPIの得点、健康や精神衛生上の問題・治療歴の有無、悩みの有無・内容について— 中部大学教育研究, 7, 63-68.
- 大西良三 (編) (2009). 学校法人中部大学七十年史 学校法人中部大学
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2005). 中部大学入学生における志望理由・目標・学科選択理由の変化 —1988年度入学生から2004年度入学生までの比較— 中部大学教育研究, 5, 15-24.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2006). 2006年度入学生における進学目標・学科選択理由・満足度の学部間比較 中部大学教育研究, 6, 87-92.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2007a). 中部大学人文学部の新生における学科選択理由の分析

- 人文学部研究論集（中部大学），17，109-121.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2007b）. 大学退学者におけるUPI得点の特徴 学生相談研究，28，134-142.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2008a）. 中部大学人文学部の新入生における学科選択理由と学科選択満足度 中部大学人文学部研究論集，19，53-66.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2008b）. 中部大学新入生の学科選択満足度の分析－入学年度，学部，学科による比較と影響要因の検討－ 中部大学教育研究，8，7-13.
- 小塩真司・桐山雅子・願興寺礼子（2006）. 大学新入生における悩みの有無および悩み内容の入学年度による変化 学生相談研究，27，138-148.

- 小塩真司・佐藤枝里・願興寺礼子・桐山雅子（2011）. 大学入学時と1年後の満足度－学科選択満足度の変化と関連要因についての探索的検討－ 中部大学教育研究，11，23-27.
- 小塩真司・吉住隆弘・佐藤枝里・願興寺礼子・桐山雅子（2009）. 新入生は大学教員にどのようなかわりを求めているのか－学生相談室アンケートの分析から－ 中部大学教育研究，9，23-28.
- 小塩真司・吉住隆弘・佐藤枝里・願興寺礼子・桐山雅子（2010）. 学科選択満足度に関連する要因－1998年度から2010年度までの新入生の分析－ 中部大学教育研究，10，47-53.
- 脇田貴文・小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2007）. University Personality Inventory短縮版の開発 人文学部研究論集（中部大学），17，123-128.

教授	学生相談室	桐山	雅子
早稲田大学	文学学術院	准教授	小塩 真司
（2011年度まで中部大学在籍）			
教授	人文学部 心理学科	願興寺	礼子
講師	学生相談室	佐藤	枝里